イタリアマルクス主義批判

グラムシについてのノート

『共産主義者』NO13（一九六五年11月）

野島三郎

一、グラムシとトリアッチ

現在、スターリン主義は、中ソ対立を基軸として東欧諸国の自立化・各国共産党の内部対立の激化といった世界的分解と流動化を深めており、いかなる力もこの必然的過程を押しとどめることができない。しばしの膠着状態も、さらにドラスチックな局面を準備するものにすぎない。今日、スターリン主義の理論的命脈は、毛沢東主義とトリアッチ主義によってかろうじて支えられている。

トリアッチは、自己の本質をイタリアと全世界プロレタリアートの前に公然と暴露することなく自然死した。一九三〇年代から戦前・戦後を通じてトリアッチは、ソ連におけるスターリン主義の専制と失政を擁護し、コミンテルンの指導者としてスターリン主義的な国際犯罪＝反革命的政策を美化する優れた理論家であった。かれは、ポーランド共産党の解体、スペイン革命の絞殺、イタリア戦後革命の敗北の直接的な責任者であった。

あたかもスターリンがレーニンに対してそうであったように、トリアッチはグラムシを自己の師とし、今日のイタリア・マルクス主義を基礎ずけたものとしてグラムシの権威をもちだす。だが、当のグラムシの思想と行動とはいかなるものであろうか。はたして、それはトリアッティの思想と行動を正当化するものであろうか。むしろ、グラムシとトリアッチとの相違は、今日とくに明白になりつつあるのではなかろうか。

グラムシの革命的マルクス主義が、トリアッチの「創造的マルクス主義」＝スターリン主義のイタリア型にまで「分子的変化」をひきおこしてきたこれまでの過程は、トリアッチの死によって一段階を劃された。一切の汚物をグラムシから洗いおとすことによって、分解しつつあるトリアッチ信奉者の革命的マルクス主義への「分子的変化」を傾向的につくりあげることは、革命的マルクス主義をより豊富なものにしていく作業の一部として極めて重要である。以下はその最初の手がかりを与えるためのものである。

二、グラムシと工場評議会

グラムシの革命的思想は、第一次大戦後、一九一七年のロシア革命の影響をうけて爆発したイタリア、とくにその革命の首都トリノのプロレタリアを中心とする巨大な革命的高揚の中で最初に形成された。共産主義的グループに指導されたこの時期（一九一八～二一年）の活動の指標は、トリノ評議会運動（彼にとってコンミューン・ソビエト型運動として意義をもつ）と、その敗北の教訓としてのイタリア共産党の創立（当時コミンテルンに加盟していたイタリア社会党の改良主義的うらぎりと、それを実際的にはようごするセルラチイ的中間派を弾がいし、真実のプロレタリア党のための闘争にふみ切った）という二つの事業にある。

二一年にはじまる党のための闘争は、戦後革命の敗北＝ファシストの抬頭という最も困難な闘いのなかで反ファッショ闘争＝党のための闘争としてはじめられた。この闘いは二二年から二三年までのソ連滞在（ロシア革命の系統的研究を行なう）、党内右翼日和主義者タスカ派および左翼小児病ボルデイガ派との闘争、二四年の党機関紙「ウニタ」の発刊、二四年から逮捕されるまでの国会議員の肩書きを利用した活動という全分野を貫徹して闘われた。

生涯の最後の期間はファシストの牢獄内での闘争である。創造的なものとしてのグラムシのマルクス主義は通常、彼が一九二六年にファシストに逮捕・投獄されてから三七年の病死までの間に記した尨大な『獄中ノート』のうちにあるとされている。だが、一九二〇年の工場評議会の運動を指導したグラムシの「新秩序」（オルデイネ・ヌオウヴオ）の闘い＝党のための闘争を無視しては、二六年からの獄中闘争＝反ファッショ闘争＝党のための闘争を理解することはできない。

だから一見すると『獄中ノート』に対するトリアッチのつぎのような意見は全く正しいようにみえる。

「各部分を人為的に寄せ集めようとする者を批判しなければならない」「この著作の導きの糸が存在することはたしかだが、しかしこれは、青年時代から出発し、ファシズムの権力掌握、逮捕、そしてその後へとつぎつぎと展開されていった現実の活動のなか以外には見いだすことはできない」「獄中の諸著述のなかには、一見してわかるとおり、それ以前の年月の闘争の反響あるいはそれへのとらわれない反省だけでなく、この闘争そのものの継続があり、闘争のあらゆる主題の深化と新しい諸条件への適応を目指すこれらの主題の発展がある」と。

ところでトリアッチはこの言葉についでつぎのようにのべることによって以上の正しい主張が純粋の形式主義的な主張にすぎないことを暴露する。「こうしてグラムシの政治思想はその有効性と真理との証拠を提示する。これは一九二一年の共産党創立の基礎となり得た特定の政治綱領につながるものではない。特殊な情勢が要求した一連の特定の戦略的・戦術的運動につながるものでさえない」と。

『獄中ノート』が二一年の「党創立の基礎となりえた特定の政治綱領につながるものではない」ならば、それは工場評議会運動とその指導部であった「新秩序」につながるものではない。なぜなら、党創立の基礎は「新秩序」の綱領（選集1「社会党革新のために」）他ならないからである。コミンテルン第二回大会で採択されたレーニン起草による「共産党インターナショナルの根本任務に関するテーゼ」（二〇年七月）は「新秩序」の綱領についてつぎのようにのべている。イタリー社会党の「トリノ支部が同党全国評議会に提起し、かつ一九二〇年五月八日の紙上に発表された提案が、共産党インターナショナルの全基本方針と一致することを認める」と。

一九一九―二一年の綱領（選集1および5に収められている）がグラムシの思想と「つながるものでない」ならば、単に共産党を創立するに至るまでの社会党内での闘争のみならず、この綱領に立脚し、その実現のためにたたかわれたタスカおよびボルデイガの左右両派との党内闘争、さらにファシズムとの闘争とさえも「つながるものではない」ことになるであろう。トリアッチにあっては、グラムシの思想と行動の特定の部分を孤立化して評価してはならい、という正しい考え方は、グラムシの全行動と全思想の「基礎となりえた特定の政治綱領」を否定するために主張されている。

ジエルラターナはトリアッチの言葉をひきついでさらに何が問題なのかを明白にしている。

「イタリア労働運動の一定の闘争の瞬間に歴史的に現われた特殊な制度、たとえば「新秩序」の運動における工場評議会を孤立させ、それをグラムシの思想の中心とし、彼のレーニン主義の唯一の証明とすることは不条理である」。そして「権力機関としての評議会の恒久的機能という反歴史的」（ノ）な考え方を否定してジエルラターナはいう。「トリアッチは評議会の積極的機能を、その教育的価値に、革命的能力の鼓舞者ということに引きもどした。これと同じ意味でグラムシその人の的確な認識も存在しているが」、そうしたグラムシの認識を「無視できる」のは「一九年―二〇年の革命的経験と、その後のグラムシの思想と行動の発展との関連を顧みない」「もっぱらこの誤ったやり方によってである。」

トリアッチはグラムシの「陣地戦」論に関連させて次のようにのべている。

「進歩勢力と労働者階級の党が権力を獲得する以前に展開する行動は、それ以前の歴史的発展の結果である社会の政治組織のなかで、有効なものと有効でないもの、保存できるもの、修正しなければならないものと破壊しなければならないものを区別するにいたる。あまりに特殊な問題に首を突込まなくても議会制度の問題をこの光のもとで見なければならないことは明らかである。プロレタリア革命に対して、かつて議会制度が存在したことのない国に、議会制度をつくることを要求することは馬鹿げたことであった。しかし、議会が、審議と人民の意志の表現の形態として、民主主義の内容をもつことに成功した他の国ぐにでは、議会という手段によっても、勤労大衆を、たんに自分たちの意志の表現ばかりでなく経済生活と政治生活の指導への積極的な参加に接近させる問題――労働者階級の権力への接近がつねに直接民主主義の形態の拡大を意味していることは依然としてたかではあるが――を解決できる。」（「グラムシとレーニン主義」、グラムシ研究Ⅲ）

このようなトリアッチ、ジエルラターナのグラムシ理解、一九一九年―二一年のトリノの運動と『獄中ノート』を対立させる主張は正しいものであろうか。いや『獄中ノート』はそのようなものとしてトリノの運動を一度でも評価したことがあるだろうか。そしてそれはそのようなものとしてトリアッチと今日のイタリア共産党の「構造改良」を擁護し、一九四三年―四七年までの戦後革命におけるブ

ルジョア支配の復興を助けたイタリア共産党のうら切りを正当なものとし、それを自らの発展物として認めるようなものとしてあるのだろうか。それともむしろトリアッチの戦後革命のうら切りとその延長としての今日の「構造的改良」に対立する内容をもち、まさしく自己の源泉としての一九一九―二〇年の工場評議会運動＝二一年党創立の基礎となった綱領にたえずたちもどり、その勝利的実現のための、その思想の深化、具体化のために『獄中ノート』はあるのだろうか。

トリアッチのみならず日本においてもその多くのグラムシ理解が、初期の「極めて強固な一箇のソヴエト主義者、暴力革命論者であった」グラムシが『獄中ノート』への発展過程において「今日のイタリア・マルクス主義の理論的・実践的支柱を形成することとなった」（柴田高好）といったきわめて機械的なものにおちいっている。そればかりか選集の2巻と5巻に収められている初期のものが単なるレーニンとコミンテルンの焼きなおしでなく、レーニンとコミンテルンに学びつつ、すでにきわめて独創的なものとしてあること、トリノ・プロレタリアの実践とその指導を基礎に哲学的とさえいえる深い政治論文集であるということが、今日、全然理解されていないことである。このことはひとつにはトリアッチを手引きとすることから理解をはじめるという権威主義的方法によって、しかもそのうえ（日本だけでなくイタリアにおいてさえもこれまで）かぎられた論文しか刊行されていないという事情によって一層うながされている。（なお刊行されている論文は、ほとんど一八年―二一年の「新秩序期」と後期の『獄中ノート』期のものであって、中期の二一年以降から二六年までのものは数篇にもみたず、とくに二三年までのものが全然刊行されていない。しかも『獄中ノート』の用語はファシストに対する獄中での配慮と自己のための覚書という形式で書れており、また入手できる文献もかぎられているという事情も手伝ってきわめて難解であって、プロレタリア大衆のためにかかれた「新秩序」期の論文とは比較にならない。そのために初期と後期にあたかも深い断層が成立しているかのようにさえみえる。

「過去と現在」という『獄中ノート』の中でグラムシはかいている。「グイチャールディーニの〃政治的および市民的回想〃型の一連の覚書をひきだすこと。回想は狭い意味の自伝的諸事件よりは、密接に自己の生活および生活上の諸事件と結びつき、その普遍的あるいは国民的価値において考えられる、市民的および精神的〃経験〃（精神的とはより倫理的――政治的な意味である）が要約されている点で回想なのである」「それはヨーロッパ的な生活と思考の様式のなかに入りこもうと努力し、すくなくとも国民的な様式がヨーロッパ的な様式と一致し、イタリアの文化的必要事がヨーロッパの文化的必要事および潮流に一致するに応じてますます国民的である（逆にそれだからこそ国民的である）」と。これは本質的には『獄中ノート』の一切に適用できる深くインターナショナルな方法についてのべているといってよいであろう。グラムシの「過去と現在」があふれでるようなインターナショナルな行動の総計であること、ここに『獄中ノート』の創造性と柔軟な思考力の一切が流れだしているのである。

三、マルクス主義政治学とは何か

トリアッチ主義者が『獄中ノート』、そのなかでもマルクス主義

政治学を展開した「新君主論ノート」（青木文庫）に依拠して自己を語るとき、もちろんグラムシにその責任が全然ないわけではない（この点については後述する）。

ところで彼のマルクス主義への貢献はレーニンのヘゲモニー概念の深化、精密化にあるとされている。たしかに彼の政治学はヘゲモニー概念がその全骨格となることによって成立している。つまり「新君主論」は「ヘゲモニー論」なのであり、マルクス主義政治学はプロレタリアヘゲモニー論を基礎としてのみ成立するのである。このことはちょっと深く考えればわかることであるが、このことは一切のトリアッチ主義的理解を前提的に排除するものであるということである。「実践の哲学の研究のための若干の問題点」でグラムシはつぎのようにのべている。「従属的集団が現実に自律的となり、主導的となり、新しい国家を喚びおこすようになる時から、新しい知的道徳的秩序、すなわち新しい型の社会を建設する必要、したがってもっとも洗練されたもっとも決定的なイデオロギー的武器をきたえあげる必要が生ずる。」（『グラムシ選集』1一二三ページ）

このプロレタリアート闘争の段階こそがヘゲモニー（プロレタリア独裁の樹立）のための闘争の段階なのである。それはプロレタリアートの「経済的同業的組合的段階、市民社会におけるヘゲモニーのための闘争の段階、国家の段階」の階級形成の三つの段階のなかで位置ずけられており、それぞれに「一定の知的活動が照応している。」グラムシにあっては最初の段階に経済主義が照応し「ヘゲモニーのための闘争の段階においてこそ、政治の科学が発展し、国家の段階においてこそ、すべての上部構造が、国家の解体という苦しみのもとで、発展しなければならないのである。」（選集1四一ページ）

柴田高好はグラムシのノートを「マルクス主義における政治学の自律化と科学としてのマルクス主義政治学の重要性が明確に指摘されている」と評価した点において他にすぐれている。だが、グラムシがその政治学にとりくんだのは「なぜなのか」という点は一切無視されている。これは一つの思想を評価する場合に決定的な弱点となり、結果論的な評価におわるからである。柴田は「かかる政治学と民主主義的自由のための闘争との不可分的関係、すなわち〃ヘゲモニーのための闘争の段階においてその政治学が発展する〃」とのべ、「ヘゲモニーのための闘争とは何か。それこそはまたグラムシ政治理論の中核をなす概念のはずである。グラムシにおいてヘゲモニーとはなによりもまず民主主義のことである」と柴田は把握する。

そのあとに柴田は「民主主義という言葉のもつ多くの意味のなかで、もっとも現実主義的な、具体的なものは、〃ヘゲモニー〃の概念との関連においてひきだすことができるように思われる。ヘゲモニー体制のなかでは、経済の発展、ひいてはこの発展を表現する立法が、被指導者から指導集団への移行（分子的な）を有利にする程度に応じて、指導集団と被指導集団とのあいだに民主主義が存在する」とグラムシを引用して説明を加えている。「権力的支配・被支配関係における相互交通、相互移行の実在的保証がヘゲモニー＝民主主義である」（以上引用は『思想』八月号「平和革命論の歴史的系譜」）と。それならばわれわれはこの引用と説明に従って抽象的な民主主義一般が不可能であり、民主主義とは支配的集団のそれであり、マルクス主義政治学としての「かかる政治学」と不可分の関係にあるのは単なる「民主主義的自由のための闘争」ではなく、奇

妙な言葉ではあるが柴田に従っていえばプロレタリア「民主主義的自由」のための闘争であることがわかる。グラムシにとって「ヘゲモニーのための闘争」とはいつでもプロレタリア・ヘゲモニーのためのブルジョアジーのそれが分析されているのである。

グラムシが政治学の自律化にとりくんだのはプロレタリアートの「段階においてその政治の科学が発展」するのは、プロレタリアートが独自な、自律的な階級として政治の領域に登場したからに他ならない。逆にプロレタリアートがそのようなものとして登場するやいなや、他の階級・階層に対してヘゲモニー的に・支配集団的に関係することを知り、学び、つまり政治的に関係することが課題とならざるを得ない。このことはプロレタリアートが支配階級たりうるためにはマルクス主義政治学の確立が必須のものである、というグラムシの理解がひそんでいる。

政治はいうまでもなく人間の人間に対する不平等な関係を前提としている。それ故にプロレタリアートは自己を等質なもの、独自なものとして登場させると共に他の等質たりえない階級・階層に対する支配をめざし、その支配を維持するために政治権力をかちとり、そうして全社会の等質化＝政治の死滅にむかわなければならない。政治的支配をめざし、政治的支配のためのしかも一切の政治的諸関係を死滅させる階級の政治学、これがプロレタリアートの政治学としてのマルクス主義政治学である。

グラムシの生涯についていえばプロレタリアートを支配階級にたかめるための実践的・理論的追究につきる。

トリノで工場評議会運動の意義をプロレタリアートにいくどとなく強調するなかでグラムシは革命が直接的に「建設」であること、「新しい秩序」であること、大衆が自主的となることをのべてつぎのようにいっている。「国家権力をにぎった階級が負わねばならない義務についての責任意識を獲得」の意義（一九一九年）「評議会が存在することによって、労働者には生産の直接の責任が生じる。労働者はその労働を改善し、意識的・意志的な秩序をたて、生産者の心理、歴史的創造者の心理をつくりださねばならなくなる。」（一九九年）「この階級にその歴史的目的を達成するように準備させるということは、まさに、プロレタリアートを支配階級として組織することを意味する。」「統治の技術という点で、適切に指導権を発揮し、労働者国家の一般行動を展開する技術という点で、現在のブルジョアジーと同種の心理を身につけなければならない」（一九二〇年）と。（選集5巻より）。

このようなものとして工場評議会を「新しい秩序」として政治権力として登場させつつあったトリノのプロレタリアートは、不可避的にプロレタリアートが解決する以外に解決しえないばかりか、プロレタリアートがそれを課題としてひきうけることによってのみ国民的階級（プロレタリアート独裁）に自らをたかめうるそうした国民的課題にぶっかった。当時すでにトリノのグラムシを中心とする共産主義的グループとプロレタリアートは端的にこの課題をひきうけ、そのための闘争に入った。逮捕、投獄によって中断されてしまった一九二六年の「南部問題にかんするいくかの主題」という未完の論文（選集2）で一九一九―二一年の運動を総括し高く評価してつぎのようにのべている。

「トリノ共産共産義者は〝プロレタリアートのヘゲモニー〟の問題、すなわちプロレタリア独裁と労働者国家との社会的基礎の問題を具体的に提起したのである。プロレタリアートは階級同盟の組織をつくりだすことに成功するにつれて指導的かつ支配的階級になることができる。この階級同盟の組織によって、プロレタリアートは、勤労人民の大多数を資本主義とブルジョア国家に反対する行動にたちあがらせることができる。」それゆえに「トリノ共産主義者として解決すべき第一の問題は国家生活の全体のなかに存在し、無意識のうちに学校や新聞やブルジョア的伝統の影響におかされている国民的要求としてのプロレタリアート自身の政治方針とプロレタリアート自身の全体にかんするイデオロギーとを変更する問題であった。」「もし大衆自身がみずから到達しようとする目的や適用すべき方法について確信をもっていないならば大衆行動はおよそ不可能である。プロレタリアートは階級としての支配力をうるために、あらゆるギルド的残滓とサンディカリズムのあらゆる偏見ないしは装いを自ら取除かねばならない。これはなにを意味するか。職業間の差別が克服されねばならないだけではなく、農民と若干の都市半プロレタリア層との信頼および同意をかちとるためには若干の偏見を克服し、ある種のエゴイズム――労働者階級の内部では職業のもつ排他性が消えてしまってもなお階級としての労働者には存続しうるし、また実際存在している――にうちかつことが必要である。」「プロレタリアートとしてみずから考えねばならない。のみならずさらに一歩進んでつぎのように考えねばならない。すなわち農民と知識人とを指導することをめざし、これらの社会層の大多数の支援と後続がえられさえすれば、勝利し、社会主義をうちたてることができる階級の一員である労働者として。これが遂行されなければプロレタリアートは指導階級とはならないし、イタリアにおいて住民の大多数を代表するこれらの諸層がブルジョアの指導下にとどまるならばプロレタリアートの攻撃に抵抗し、それを打砕く可能性をこれらの諸層は国家にあたえることになる」と。プロレタリアートがイタリアの国民的諸課題としての南部（農業問題、知識人、ヴァテイカン問題）問題を自己の課題として考えなければならなくなった、という当時のグラムシを中心とするトリノの共産主義グループの問題意識は、資本主義が帝国主義の段階に入ったことを物質的基礎にしている。プロレタリアートの国民的諸課題としての民族植民地問題、農業問題、財政問題、軍事、戦争問題、さらに労働問題（労働貴族の発生、組合主義、社会民主主義）それ自身さえも総じて帝国主義の問題なのである。このことはプロレタリアートの階級的利益を「国民的利益」に解消させる（例えば日本共産党の綱領、昨年の四・一七ストに対する態度）ことをなんら意味しない。国民的諸課題・諸要求はプロレタリアートの階級的指導によってのみはじめて組織化することができるし、そうでない場合はグラムシのいうごとくプロレタリアートはブルジョアジーに決定的打撃を与えられることになる。実際プロレタリアートは他の階級、階層との闘争、同盟軍といった政治的諸関係のなかで実践的にみずからを階級として認識し、等質化し、行動していくという一箇二重の関係において自己階級へ形成していくのである。

政治的領域に登場したプロレタリアートは、ヘゲモニーのための闘争を展開するが、それは、国民的諸課題の解決をブルジョアジーがいかに為して来たか、いかにして支配に到達したのか、たえず現

われる諸課題をどのように解決しようとしているのか、またはできないか、いかに支配しているのかの分析と考察にむかわざるをえない。つまりグラムシは「〝敵軍の掃滅〟（戦略目標）は〝兵士を殺すこと〟ではなしに〝有機的大衆としてのかれらの結合を解体させること〟を意味する」という軍事著述家からの引用に註釈して「この定式は適切であり、政治の用語法のなかでも使うことができる。問題は、政治生活においてなにが本質的な有機的結合かを確認することである。」とのべている。グラムシがたえずマキアヴェリ、ガリバルディ、マッツイーニなどのリソルジメント運動、ジョリッティ主義、ファシズム、南部（農業）問題などを分析の対象にあげた理由なのである。

『獄中ノート』はそれ故にたえず二つの側面をとり扱っている。ブルジョアジーの政治生活における「本質的な有機的結合」点を明白にすることとプロレタリアートのヘゲモニー＝破壊のための闘争、とプロレタリア復興のための闘争、ブルジョア国家の秘密をあきらかにすることとプロレタリア国家の基礎をみいだすことといった側面――つまり「〝二つのコンフォルミズモ〟間の闘争、すなわちヘゲモニーの闘争、国民社会の危機」として表現され、「ヘゲモニーの概念は、国民的性格の諸要求が一つの結び目をつくっている概念」である。そうしたものとして「政治学は国家の科学を意味するのみならず、被統治者の能動的同意をかちとることのできる実践的および理論的活動の複合体である」とグラムシは規定したのである。

マルクス主義政治学が客観的な認識であるためには主体的な実践と統一されていなければならない。それ故に政治学を「なぜやるのか」という原理的な問は「政治そのものの否定、止場のために」（柴田高好『マルクス主義政治学序説』）というのでは全く不充分である。それはプロタリアートの現在的任務・諸課題（ヘゲモニーのための闘争）との一箇二重の関係として統一されていなければならない。現在と未来、存在と思惟、理論と実践との統一に支えられていないならば「民主主義」「自由」「政党」「ヘゲモニー」「独裁」「政治の死滅」などは抽象的な形式的把握にとどまるのである。

四、グラムシのヘゲモニー論

プロレタリアートがその独裁を樹立し、それを維持することはその国民的階級への形成、ヘゲモニーのための闘争と全く同一のことである。またプロレタリアートの独裁という目標から逆限定されたプロレタリアの現在の闘争、これがヘゲモニーのための闘争である。このことは一九〇五年の『民主主義革命のための二つの戦術』でレーニンが社会主義革命ではなく「民主主義革命」を当面の任務としながら、民主主義的、国民的諸課題におけるプロレタリアートのヘゲモニーの強調が、ロシア革命の性格を社会主義革命と規定した『四月テーゼ』による党の再武装を必然化させざるをえなかったことに証明されている。レーニンの『二つの戦術』はその後あきらかになった誤りをも含めて、その混乱自体が現在に未来を結合するための貴重なヘゲモニー理論の古典をなしている。

国民的、人民的、プロレタリア的諸課題に対するプロレタリアートのヘゲモニーのための闘争なくしてプロレタリアートは勝利できないばかりか勝利したとしても（第一次ハンガリア革命の敗北）独裁を維持することができない。「共産主義者は、労働者階級の直接当面する目的や利益のために闘う。だが共産主義者は現在の運動の中にあって、同時に運動の未来を代表する」（「共産党宣言」）そうした二重の形態における闘争がヘゲモニーのための闘争なのである。

ジノヴィエフの『ロシア社会民党史』（戦前訳の復刻が長船社研より出版されている）によれば、ナロードニキのチホミロフが「革命のために労働者階級が重要である」とのべたことに対して、まだ革命的マルクス主義者であったプレハーノフはこれを転倒して「革命が労働者階級のために大いに重要である」とプロレタリアートのヘゲモニーを強調したという。この問題はレーニンによって「〝純粋〟の社会革命を期待する人は、けっして社会革命にめぐりあえないであろう」（『自決にかんする討論の総決算』）という帝国主義段階についての把握に支えられたプロレタリアのヘゲモニー論として、民族植民地問題、農業問題、帝国主義戦争の問題のなかでたえずくりかえし深められている。実際レーニン主義のナロードニキ、経済主義、メンシェヴイキとの間の論争はすべてヘゲモニーをめぐる論争であった。

一九二〇年にグラムシはかいている。ロシア革命のあとをうけた西欧の革命の敗北は「破壊行為としての革命に、共産主義的な意味での建設的過程としての革命がつづかなかった」ことによる。つまり「(1)ブルジョア国家の政府打倒をめざすかぎりでは、たとえそれに成功しても、かならずしもプロレタリア革命ではなく、共産主義革命でもない。(2)代議機構と、中央政府がブルジョアジーの政治権力を使するための行政装置とを、絶滅するかぎりでは、たとえそれに成功しても、プロレタリア革命ではなく共産主義革命でもない。(3)大衆蜂起の大波によって、共産主義者といわれている（しかも真実まじめな共産主義者でもある）人びとの手に権力がわたったとしても、それはまだプロレタリア革命ではなく、共産主義革命でもない。革命がプロレタリア的、共産主義的生産力の解放であってはじめて、革命はプロレタリア革命となり共産主義革命となるのだ。この生産力は、まさに資本家階級の支配する社会の内部で仕上げられたものである。生産と分配の諸関係の中に新しい秩序をうちたてるためには、しんぼう強い、秩序だった努力が必要だが、この努力を開始することのできるプロレタリア勢力、共産主義勢力が拡大し、大系化するのを、どれだけ助け、推進することができたかによって革命のプロレタリア性、共産主義性の程度がきまる。そして、生産と分配の諸関係のなかのこの秩序が確立するならば、この基礎のうえに階級に分裂した社会が立つことは不可能となるだろう。だから、この新秩序が体系的に発展する方向は、国家権力の衰滅の過程と一致する。つまり、プロレタリア階級の政治的防衛組織の体系的な解消と一致するのだ。そして、プロレタリア階級は、階級としては解消し、人類となるのである。」（グラムシ選集5「二つの革命」一一七ページ）というソヴエト論と関連させてだされている考え方である。

この考え方をうけて『獄中ノート』においてもたえず革命が「破壊復興としてでなく、機械的」に破壊として考えられていることの危険を指摘し、一層それを理論的に発展させている。ここからその経済主義批判、ヘゲモニー理論、ソヴイエトと政党といったヘゲモニー装置と統一戦線、同盟軍、陣地戦というヘゲモニーのための戦

術が追究され提起されているのである。グラムシはこうした問題について獄中でかいた「イタリアにおける国民と近代国家の形成と発展の上での政治指導の問題」（選集2巻）のなかでつぎのようにのべている。「ある社会集団の至上性は〝支配権〟として、および〝知的ならびに道徳的指導〟として、二つの仕方で現われる。ある社会集団は、それが武力に訴えても〝一掃〟ないしは服従させようとする敵対諸集団を支配する。そして近親諸集団と同盟諸集団を指導する。ある社会団は統治権を獲得する以前に、すでに指導的でありうるし、またむしろ指導的であらねばならぬ（これが権力獲得そのものにとって主要な諸条件の一つである）。その後、その社会集団が権力を行使するとき、そしてなおもその権力を固く保持するならば、その社会集団は支配権を握ることになる。しかしかれらはなお〝指導的〟でもありつづけねばならないのである」。こうした実践的な把握からグラムシの国家論が展開される。「ある社会集団の至上性」〝国家〟の「二つの仕方のあらわれ」はつぎのようなものである。「さしあたって上部構造の二つの大きな〝次元〟を確保することができる。一つは〝市民社会〟と呼ぶことのできるもの、すなわち俗に〝民間〟のものといわれている諸機構の全体の〝次元〟であり、他の一つは〝市民社会あるいは国家〟の次元である。それは、支配的集団が全社会において行使する〝ヘゲモニー〟の機能と、国家や〝法〟治に実現される〝直接支配〟あるいは命令の機能に対応するものである。」（選集3八八ページ）そうした「ヘゲモニー装置」として政党、組合、知識人、新聞、ラジオ、議会の役割りをあさらかにして「世論とよばれているものは、政治的ヘゲモニーと察接に結びついており、〝市民社会〟と〝政治社会〟の、同意と強制の接点である。国家は、あまり人気のない行為をはじめようとするとき、まえもってそれに適した世論をつくりだす。すなわち市民社会のある要素を組織し、集中する。」「世論とは、不一致になりうる公的な政治意志の政治的内容である。だから新聞、政党、議会など世論機関の独占をめぐる闘争がつぎのようにして在存するのである。すなわち、単一の勢力が、意見を、したがって国民的政治意志の原型をつくり、不一致を個々のばらばらの微粒として散らすようぐあいにしてである。」「すべてこうしたことは、三年か四年か五年ごとに一定の日にイデオロギー的（あるいはむしろ感情的）優越をしめれば十分である」（青木文庫「新君主論」）と。

以上のようにグラムシ国家論はけっして「民主主義」「議会主義」「平和主義」の物神化とは関係がないばかりか同じ階級支配の「二つの仕方のあらわれ」としてとらえられている。にもかかわらずそのの国家論は「力と同意」「権威とヘゲモニー」「暴力と文明」「独裁とヘゲモニー」といった機能的な、政治的な把握から一歩もでないために、このそれぞれを分離して把握することを可能とし、トリアッチ主義者によってきわめてプラグマチックに「構造改良」路線の「理論」的支柱に利用されている。もちろんそのことはグラムシ国家論の歪曲的理解をも必然化させずにはおかない。

五、マルクス主義国家論とは何か

国家が「独裁＋ヘゲモニー」とはどの点でいえることなのであり、どのように統一されているのであろうか。グラムシにとってチが国家を「勢力要因」とみなした（「合法と非合法」）ことに対応

し、いうまでもなくレーニンが国家を支配階級の「武装部隊」であり、「暴力」と規定したことに対応している。「独裁」「暴力」は自然力ではなく、自然力と考えることはすでに国家に対する物神化におちいっているのである。だから「暴力」は「勢力要因」であり「武装部隊」でなければならない。つまり暴力は組織された人間なのである。それ故に国家は暴力的であるためには武装部隊でなければならず、市民を「公人」として組織していなければならない。市民はすべて「公人」であることが前提となり、一部は官僚、武装部隊である公職に、他の部分は官僚、武装部隊を「公人」としての自己の対象化されたものとしてみなす「国民」にならなければならない。つまり官僚、軍隊、警察は社会の公僕とみなされてはじめて、また国民から「公共的」とみなされてはじめて暴力部隊なのである。

この場合すべての市民は「公人」と「私人」との自己分裂におちいり、その対象的表現として国家を「公のもの」、自己を「私なるものとしてみいだし、自らを組織する。利己的なるものとしての「私人」は国家を媒介にしてはじめて自己を「公人」としてみいだす。または「私人」としての自己は「公人」としての自己を国家にみいだすことによって国家を容認し、国家を強化する。このことは組織された武装部隊に対して、一般の市民、国民は原子化され、細分化され、抽象化されること、つまりプロレタリアートは自らを階級として組織しえないことを意味する。「私人」「私的利害」「特殊利害」でしかない抽象的な原子化された市民、人民、国民は国家によって四己を組織化するのであるが、このことは国家が「抽象的」「一般的」「共同的」「公共的」なものとしてみなされることによってである。国家が国家たりうるのは自らを「共同性の幻想」「幻想的共同体」として存在するが故である。

国家がこのように「幻想的共同体」であるが故に国家は武装部隊たりうるばかりか暴力的たりうるのである。ブルジョアジーは自らをそのようなものとして「合法的」と感じ、ブルジョア支配を「合法的」と感ずる国民の一定部分を武装部隊として組織、編成し、大多数の国民を「合法的」に支配するのである。それ故に武装部隊は必ずしも国家ではない。

こうした幻想は資本制生産様式からたえず立ちのぼってくる。資本制生産様式を唯一の永久的な普遍的な社会的生産と感ずる資本制生産様式の物神化、労働者が労働力商品であることを「自由」「平等」「功利」と感ずることのなかから、資本と賃労働の「運命共同体」、企業防衛、「民族共同体」、祖国防衛などのイデオロギーがたえずたちのぼってくる。この「共同体の幻想」の強化はこの社会的生産様式をイデオロギーの内にも実体的にもたえず強化するものとなる。

「支配階級の思想はどの時代にも支配的思想である。すなわち、社会の支配的な物質的な力であるところの階級は、同時にそれの社会の支配的な精神的な力である。物質的生産の手段を左右する階級は、それと同時に精神的生産の手段を左右する。だから同時にまた、精神的生産の手段を欠いている人々の思想は、おおむねこの階級に服従していることになる。支配的な思想とは支配的な物質的諸関係の観念的な表現、思想としてとらえられた支配的な物質的諸関係にほかならない。したがって、まさしくその一つの階級を支配階級にするところの諸関係の観念的な表現、すなわちこの階級の支配の思想にほかならない。」（マルクス「ドイツ・イデオロギー」）

つまり国家に対する「幻想」「同意」を生産し、国民を「組織し結

合する要素」（グラムシ）としての「ヘゲモニー」とは「独裁」の別名に他ならず、それ故に「ヘゲモニー」の強化とは一層「暴力的」たりうることである。

「ヘゲモニー装置」のもっとも安定した様式、それが民主主義制度であり、この制度において労働貴族、代議士、弁護士、知識人としての支配階級への「分子的移行」を容易にし、それはまた「同意」を組織するための「世論」制度でもある。

ブルジョアジーの独裁は、その特殊利害を維持し追及するために、その特有の（幻想的共同体として）形態をとるのであって、それはナショナルリーダーとしてヘゲモニー的でなければならず、外部に対しては民族として、内部に対しては国家としてあらわれるのだ。「まさに特殊利害と共同利害とのこの矛盾にもとづいて、共同利害は、個別および全体の現実的な利害からきりはなされて国家として一つの独立な姿をとる。そしてそれは同時にまた幻想的な共同性としてである」（マルクス『ドイツ、イデオロギー』）国家は「幻想的共同性」を本質とし、その実体としての「武装部隊」は「ヘゲモニー装置」（裁判所、警察、牢獄、議会など）でなければならず、「暴力的」「民主主義的」「公共的」に現象し、機能することができる。

国家が「一般的」「共同的」としてあらわれるのは「幻想的」にである。ここにこそ国家の神通力があらわれる。国家を単に「暴力」としてのみ評価するのは、「公共的」と評価するのと同じく一つの物神化におちいっている。つまり国家を構成する実体、担い手を、官僚、軍隊を恒久的、不変的と考えることに通ずるのである。それはいつも国家（民主主義、議会主義）制度を通じての変革とか（協会派の綱領をみよ）、少数の前衛による極左主義的冒険への道をあけることとなる。グラムシは機能論的だがそうした危険をさけるために「独裁＋ヘゲモニー論」を展開しているのであって、トリマッチ主義はこの結論を全体からきりになして最悪の形態で利用しているのである。

六、構造改良論の批判

トリアッティは「社会主義へのイタリアの道」をつぎのようなものとして提起している。「われわれは民主主義者である。なぜなら、われわれ、憲法、民主主義的慣習および憲法のさだめる法秩序の範囲内で行動しているからであり、すべての人にこの法秩序を尊重することを要求し、すべての人の側から、なによりもまず為政者の側から憲法のあらゆる規準が実行されることを要求しているからである。」（「社会主義、民主主義」二八一ページ）。マルクス・エンゲルス・レーニンはブルジョア国家機関は社会主義社会の建設に利用することができない、労働者階級自体が指導する国家機関によってとってかわらなければならないとした。「今日でも、この立場は完全に有効であろうか？ここに討議の主題がある。事実、社会主義の前進の道が、民主主義の領域で可能であるばかりか、議会の諸形態を利用することによっても可能である、とわれわれが確認するときには」「こうした立場のなかのなにものかを訂正しているのである。」（同、一六一ページ）。「現在の条件のもとにありながらも、勤労者と中産階級に有利な経済政策、政府じしんに議会をとおして反独占主義の行動をおこなわせる経済政策をおしつけるために」「これらの改良」のスローガンとこれまでの「鋭い革命的危機にさいしてか

かげられるべき、もっぱら権力をめざす闘争へむかって国民大衆を指導するためのスローガン」とを「混同することはあやまりであろう。構造的改良は」「絶対的目標であり、政治闘争の現在の条件のなかで実現することのできる絶対的な目標である。」この闘争によって「経済生活への国家の干渉さえも、まったく異なった意義をおびてくることができる。政府が独占諸グループのまったくの業務委員会として行動し、国家資本主義の諸形態が巨大資本家の意志と利益への国家機関の単なる従属形態にすぎなくなっているときとは、まったくことなった意義をおびてくることができる。」（同、二七一―二七三ページ）。

このようなものがグラムシの「社会主義へのイタリアの道」と一体どういう関連があるというのだろうか。グラムシは照らしてみればこれは完全に反プロレタリア的な思想であることがわかる。構改派がこのトリアッチの提起を「理論」ずけるためにマルクス主義国家論を歪曲して、その場合にグラムシを採用してつぎのようにいっている。国家には「階級的暴力的機能」の側面と「社会的行政的機能」の側面との、または「独裁性」と「公共性」との二つの側面があると。但しグラムシの「独裁＋ヘゲモニー」は明確に階級的なものとして提起されている。ここではマルクス主義国家論の立場から国家論の歪曲についてだけ批判しておきたい。

たとえばジエルラターナによればこの二つの側面のうち、国家の「正当な機能」である「社会的行政的機能」「公共性」の側面が、現代の国家においてますます増大していると。彼等は国家の機能を二つに切りはなし、プロレタリアートが「公共性」の側面を制限していく過程（議会による立法化）が社会主義への「構造的改良」であり「国家機構の破壊はかならずしも必要がない」とする。たしかに社会法、労働法の領域の拡大、国営企業の増大、財政政策や公共事業の拡大など、国家独占資本主義段階では、いわゆる「行政的機能」の役割りは増大している。だがしかしこのことは国家が独占資本総体の利益を守るために払う努力を意味するだけである。しかも経済危機の深化、市場争奪戦の激化はますますそうした資本の支配の安定のためのみせかけの、損のない「譲歩」すらブルジョアジーには不可能となりつつある。つまり公共事業、福祉事業、財政政策は独占資本の搾取と収奪の手段にますます転化するのである（公共料金の値上げ、公債発行など）。こうして国家とプロレタリア人民、国民とのあいだにはますます対立が激化していくこととなる。

こうしたことが不可避なのは国家の「公共性」の性格が本来的に階級的なものであるからである。つまり国家の「社会的行政的機能」の増大とは、その「階級的機能」の増大であり、本質的には国家という「共同性の幻想」が一層強化されることを意味する。「共同性の幻想」の強化はますます国家が暴力的たりうること、その「万能化」、強権化に他ならないからである。

それだけではない。このことは同時に労働者人民からの「公共性」「社会的行政的機能性」をはぎとり、その活動の社会的対象をはぎとり、つまり個性＝活動をそう失させることとなる。同じことが一方では抑圧として他方ではそう失としてあらわれる。

このことをマルクスはその小冊子で次のようにのべた。「すべて共通の利害はただちに社会からはなされ、よりたかい一般利害として社会に対置させられ、社会の成員の自主活動からもぎられ、統治活動の対象にされた村の橋、校舎、公有財産から、フランスの鉄

道、国有財産、国立大学にいたるまで、すべてそうなった」（『ブリュメール十八日』）と。

だからして国家独占資本主義は構攻派とは逆の意味で労働者階級にとって「有利な局面」をつくっている。つまり国家は「社会からみずからをますます疎外していく権力」（エンゲルス）として最高の段階にあり、その意味で国家を社会から「孤立させ、これを唯一の標的として」（マルクス）革命に対立させるからである。労働者人民はそのうしなった個性、つまり活動の社会的対象を、まず国家の破壊という活動として再び見出すのである。

ところでそうした国家の「公共性」の拡大はいかなる手段によっておこなわれるのか、議会主義的手段によってである。それ故に、構改派の目的とその手段としての議会主義ということのなかにその本質は一貫して暴露されている。

労働運動、大衆闘争などにおける労働者大衆が自己を前進させ、確固不抜にうちかため政治的なものとして、本来的に階級である故に自己が全国的なものとして、「国民的」なものとして登場させるのは、ソヴイエトである。本来的にソヴイエトは大衆行動そのものである。また「ヘゲモニーとは権力をソヴイエトへということである」（ジイノビイエフ『ロシア社会民主党史』）

だがブルジョア社会では「政治」は議会とか国家の手にとりあげられているために、労働者大衆の自己を政治的な存在たらしめようとするやみがたい衝動は、その合法的な形態である議会と投票にむかうのである。なぜなら議会と投票という民主主義の形態は、ブルジョア社会で諸利害が全国的な唯一の形態であるからだ。労働者人民はそれ自身として政治的であるにもかかわらず、合法的に政治的であることを認められているのは投票行為であり投票だけである。だから投票は労働者人民が「政治的」であり「立法者」「執行者」であることの幻想である。

選挙権の行使は、現実の行為としてではなく、幻想的には労働者人民が現実の政治にとってかわろうとする行為の公認である。それは国家だけが行う政治に対して人民が国家に変って「政治」を行い、国家に対して「政治」を行う幻想（主権在民）の現存である。グラムシもマルクスにならってであろうがいっていることであるが「すべての官職の選挙制という人民の要求、極端な自由主義であると同時に、その解消でもある要求がでてくる。」またブルジョア民主主義はある程度「この根源的な人民の要求にたいして幻想的な満足をあたえている」（文庫一五一ページ）。

これは国家に対する幻想的な「反乱」行為、形式的な「内乱」行為である。これは国家の内部での国家に対する人民の「反乱」を前提にしなければ、国家はその外部で人民の現実的な「反乱」の前にたたなければならないからである。

もちろん国家内部での（国家制度＝憲法＝議会主義内部での）「反乱」であるから、現実には現存の国家制度への同意として、容認として結果する。そして労働者人民は現実には自己をますます非政治的な存在として、国家と議会は政治的な存在として立ちあらわれることになる。

こうして国家の「公共的」機能の拡大、議会によるその促進ということは、本質的には労働者階級の行動なしに、労働者階級の行動に対してということである。たとえ労働者人民の「大衆行動を強めつつ」ということをいくら強調しても、大衆行動＝ソヴイエトが主

体でなく、ブルジョア国家が「主体」であり、大衆行動は国家にたいする圧力であり、補足であり、請願でしかない。それは労働者階級にとって自己が手段化され、国家の行動が目的化されている状態を意味する。これはスローガンにおける大衆行動を高揚させる意義ではなく、純粋に「絶対的目標」としての改良的スローガンとこう、改良主義の絶対化と密接に関連している。

以上のことから構改派の主張の反プロレタリア性は明白である。それは国家の階級性を糊塗し、議会主義、資本制国家国家独占資本主義の最悪の美化となっている。それ故に現在すすみつつある資本主義経済の危機は彼等の破産を明白にせざるを得ないのである。そうしてむしろこうしたスターリン主義と社会民主主義の議会主義的またはうらがえしとしての極左主義的なイデオロギーのプロレタリアートに対する世界的な汚染こそが現代の民主主義（ブルジョア独裁）の支えとなっているのだ。

革命的議会主義は以上のような議会主義と無縁である。それはつぎのような立場にたってプロレタリア革命運動、ヘゲモニーのための闘争を有利にするためにのみ提起されている。議会主義が「大衆にとっても老いぼれているとみなすべきでない」（レーニン）現実にあっては、革命党は「労働者人民の政府与党に反対を表明する」ために投票するという議会に幻想を持ったままの部分をも含め、自己を政治的存在たらしめようとする労働者人民の政治的働動と意志に介入し、そうしてそうした衝動と意志が、みずからの行動と経験を通してその限界をのりこえて前進しうるように指導し、大衆の一票一票を現実の反乱（議会とその幻想の破壊＝大衆行動）の契機として組織するために闘うのである。

労働者人民の棄権が、議会の破壊たりうる棄権でないかぎり、革命党の棄権への呼びかけは、ブルジョア政治、国家、議会、選挙などに対する空論的な、精神的な否定にすぎず、現実的にはブルジョア支配への完全な屈服、政治的下僕としてあらわれる。そのうえ労働者人民の政治的衝動は、議会と議会主義的党派、ブルジョアジーによって組織されるがままに放置され、資本家階級の支配と安定として結果し、階級闘争の後退を助けることとなる。そして革命党は自らをいつまでも階級本隊はもとより国民的諸階層と切断された一セクト的グループ以上をでることもなくまた党たりえない。

七、グラムシの実践の哲学について

いわゆる「平和革命」、「議会的手段による革命」、「構造的改良」などがグラムシにとって批判の対象でしかないことは、彼の「実践の哲学」論から問題をながめれば明白になるのである。実際、「ヘゲモニー論」「陣地戦」論、「党＝知識人」論はそうしたグラムシの史的唯物論把握から流れだした有効な理論に他ならない。民主主義的、平和的、構改派的理論の破産はつぎのように質問すればたちどころにその馬脚をあらわすのである。

つまり、プロレタリアートが自らを意識し、認識するためにブルジョア国家を媒介にすることができるだろうかと。グラムシにとってそうした問がマルクス主義者の口に出ること自身考えられぬことであった。「〝人間性〟とは〝社会諸関係の総体〟である。」「人間はイデオロギーを場として構造の矛盾を意識する」「構造と上部構造とは、一つの〝歴史的ブロック〟を形成する。」グラムシはその理論のすべてをたえずこの史的唯物論の原則から出発させる。

るべきか。その形態は、それじたいとして正しく発展する力、たえず自己を綜合する力をもち、ついには社会主義国家の骨らねばならぬ。そして、その社会主義国家のなかに、プロレート独裁が具体化するのでなければならぬ。現在の緊急な必足させつつ、また一方では、未来を創造し〝予想する〟ためを有効に行いつつ、現在を未来にいかに溶接すべきか。」（グ選集5「労働者民主主義」一三三ページ）「工場内部委員会は、工場内の資本家の権力を制限し、裁定と規律の機能を展開し これは発展し豊富になり、明日にはプロレタリア権力の機り、指導と管理の有用な機能のすべてにわたって、資本家にかわるにちがいない。今ただちに労働者は、最良の、もっと高い同志たちのなかから選ばれた代議員の大集会をひらく 選挙の準備にかからなければならない。そのスローガン場の全権力を職場委員会へ』であり、さらにこれと並べて全権力を労農評議会へ』である。」（同前一五ページ）

会主義者は）民主制国家の諸機構の永久性を信じ、それらには完成されたものであるという、自由主義経済学者ふうな錯覚に、かれらもまたおちいっていた。かれらにいわせ主制諸機構の形態は、そこここに手を加えて矯正することのであり、基本的には尊重すべきものなのである。」「われ会主義国家が資本主義国家の諸機構のなかに肉体化するこないこと、社会主義国家は新らしい創造物であることを信

どのようにそれを規律づけ、どのようにそれに政治的形態

ない。そうではなくて、過渡期の国家であって、私有財産、階級、国家経済の抑圧をもって競争を抑圧するという任務をもっている。ところでこの任務は、議会制民主主義では実現できない。」（グラムシ選集5「国家の獲得」一二三ページ）

グラムシは『新君主論』においてもつぎのように経済主義の領域内でのプロレタリアの「政治的」行動の限界について提起している。

「国家の問題が提起されるが、それは支配諸集団との政治的―法律的平等の達成という場にかぎられている。なぜなら、要求されるのは、立法や行政に参加する権利、さらには立法や行政を修正し、改革する権利があるが、これは現行の基本的枠内でのことである。」（青木文庫『新君主論』九八ページ）

ところがプロレタリアートのヘゲモニーが確立された場合について、「そのさい、国家とは当然、ある社会集団そのものの最大限の膨張を助ける諸条件をつくり出すための、その社会集団の専属機関とみなされるが、この発展、この膨張は、普遍的膨張の、〝国民的〟エネルギー全体の発展の原動力とみなされ、また、そのようなものとして現われることとなる。」（同前九九ページ）

グラムシは「憲法や議会とともに〝自然な〟〝進化〟の時代がはじまった」とする「見方の結果おこる国家の概念の貧困化」（文庫『新君主論』七二ページ）を嘲笑している。グラムシにとってプロレタリアートは「新しい秩序」をつくり、その担い手となることに

「人間性」＝新しい「社会的諸関係の総体」にならないそうした存在なのだ。ブルジョア国家という「上部ルジョア的「構造」を前提している。プロレタリアー配者としての上部構造、国家、イデオロギーを生産し しえない。それこそが「ヘゲモニー論」の問題意識で。

』の問題意識は一つ一つ正確に初期のそれに照応す るのは発展であり、具体化である。トリアッチ主義者の初期の論文が単なるレーニンのロうつし、初期コミりかえしにみえる。だが初期の論文は『獄中ノート』べて内包している。グラムシの初期から死までの追究ー」論、つまり「ソヴイエト権力」論＝「国家死滅」ている。『新君主論』で直接にソヴイエトを論じた「個団的人間」（二八ページ）、「官僚制」のなかの「有機三九ページ）、「代議制における数と質」（一五三ページ国家の創設者としてトリノの運動を評価した「自然成指導」（一八六ページ）などばかりではない。『新君主「ソヴイエト権力」論でもあることをみなければならな

アートは知識人＝ボルシエヴイキ党とソヴイエトという装置によって自己を意識し、自己を自主的、自律的なことができる。これがプロレタリアートの「民主主義」める。これがグラムシの把握である。

アートが「現実に自律的となり主導的となり、新しいやこす」ヘゲモニー集団として形成されるためのイデオロギー的武器こそが「実践の哲学」としてのマルクス主義である。ところで「実践の哲学」はグラムシにあっては自立的な階級としての自己意識に他ならない。「大衆活動家は実践的に行動するが、かれが変革するかぎりの世界の認識にほかならないかれの行動についての明瞭な理論的意識をもっていない。かれの理論的意識は歴史的にはかれの行動と対立していることさえありうる。かれは二つの理論的意識（あるいは矛盾した意識）をもっているということもできよう。」「自己自身の批判的理解は、だから現実についての自分自身の考え方の高次の仕上げに達するためにはじめは倫理の領域において、つぎには政治の領域においてたたかわれる政治的〝ヘゲモニー〟の闘争、対立する指導の闘争をつうじておこなわれるのである。一定の主導的勢力の部分であるという意識（すなわち政治意識）は、理論と実践とがついにはそこで統一される今後の前進的な自己意識に達するための最初の段階である。」（「若干の予備的参照点」選集1二四八ページ）このような哲学と政治、思惟と存在、理論と実践の統一としての実践の哲学およびヘゲモニー装置としてボルシエヴイキ党の意義についてのべ、「唯一の〝哲学〟は、現実の歴史、すなわち生活そのものである。ドイツ古典哲学の相続者であるドイツ・プロレタリアートという命題は、この意味に解釈することができるし」またレーニンのヘゲモニーの理論化、「ヘゲモニー装置の実現は新しいイデオロギーの地盤を創造し、意識と認識方法との改革を規定するかぎりで」認識論的な意義をもつものとされる（「文庫」二三―二四ページ）。

ヘゲモニー装置としての党について「若干の予備的参照点」のなかで次のようにのべている。「批判的な自己意識というのは、歴史

的政治的には知識人（ないしインテリの創造を意味する）大衆は独立した〝対自的〟なものとはならない。知識人なしには組織は

「関の理論的側面が概念的、哲学的仕上げを〝専門とする〟人びとの〝ある層〟において具体的に区別されるのでなければ、組織はない」

「現代の世界において、本質的には政党が世界観に合致した倫理と政策とを仕上げるかぎり、いいかえれば、政党がほぼ世界観の歴史的「実験家」といった機能をはたすかぎり、世界観の仕上げと普及とにおいて政党がもっている意義と重要性とを強調することが必要である。政党は活動的な大衆を個人的に選抜する。そして、その選抜は実践の領域においても理論の領域においてもおこなわれるが、世界観が古い思考様式をその死活にかかわるような根本的な仕方でなければあるほど、この選抜は理論と実践とのあいだにますます緊密な関係をもっておこなわれる。それゆえ、政党は全面的な、全体的な新しい知性の彫琢者、いいかえれば、現実の歴史的過程という意味での理論と実践との統一の坦堝である、ということができる。また、そこから、党が個人加盟によって形成されること、〝労働党〟型のものでないことがどれほど必要であるかも理解される。」（グラムシ選集1「若干の予備的参照点二五〇ページ）そうした党がボルシェヴィキ党に他ならないことは『新君主論』を読めばあまりにも明白である。

「発展と再組織は不可能とみなされる伝統的な勢力にもとづいて打算するだけではなく、新しい独創的な力をよびだすことをめざす」（『新君主論』文庫八四ページ）。ヘゲモニーのための闘争において決定的なのは「陣地」戦である。戦争論における機動戦（運動戦）＝（政治闘争における武装蜂起をさす）と陣地戦（攻囲戦）（要塞戦）という用語を政治闘争に適用したものである。㊀まず前提的に「経済的危機がそれ自体として直接に根本的な事件を生じさせることは、まったく考えられない」という経済主義批判がある。㊁「東方では国家がすべてであり、市民社会は原生的でゼラチン状であった。西方では、国家と市民社会のあいだに適正な関係があり、国家がぐらつくと、たちまち市民社会の頑状な構造が姿をみせた。国家は第一線塹壕にすぎず、そのうしろには要塞と砲台の頑状な系列があった。」「問題は現代国家に提起されるのであって、ほかのところでは克服され、時代錯誤的になった形態がまだ生きている後進国や植民地には提起されない」という「国民的性格」のちがいからこれが提起されていることである。レーニンはその「左翼小児病」でロシア革命とそれを指導したロシア共産党をロシア特有の条件に帰すことに反対したが、グラムシがこれを知らない筈がなく、むしろコミンテルン第三回大会（レーニンはそのときこの画期的な小冊子をかいた）におけるレーニンの統一戦線の提起を深める立場に立ってその「陣地戦」論を展開していることである（同、二〇二ページ）。それ故にこの「東方」と「西方」の対立的な提起はレーニンの「資本主義が発達し、最後の一人まで民主主義的文化と組織性とがあた

もあるこの国では準備もなしに革命をはじめることはまちがいであり、ばかげている」という言葉にそっての理解できるのであって、よくいわれているようにロシア革命とはちがった革命、プロレタリア革命・ソヴイエト権力・ボルシエヴイキ党などの否定とはなんの関係もないどころか、ロシア革命＝レーニン主義＝「左翼小児病」批判を「西方」のイタリアへどう適用するかがグラムシにとって問題である。このことは、ルカーチにとってローザ・ルクセンブルグ批判が問題であったと同じように、グラムシにとって社会民主主義（労働組合主義、経済主義、ユートピア主義）の克服が問題だったからである。（ルカーチは「歴史と階級意識」および「レーニン論」でグラムシの「実践の哲学」＋「民衆」＝組織活動という結論に到達している。グラムシはこれを実践した。だが、ルカーチは二度も文部人民委員になったが、組織活動はしなかった）

ブルジョアジーの「陣地」としての社会民主主義、議会主義、労働組合主義、民主主義の克服＝プロレタリアートのヘゲモニーのための闘争、これが「陣地戦」である。『獄中ノート』にはつぎのような彼のいう「西方」「陣地」の指摘がみられる。

「ジャコビニズム（内容上の）の発展、および、フランス革命の前進の段階で発現した永久革命方式の発展は、その法律的憲法的〝完成〟を議会制度のうちに見出している。」「ジャコバン主義者がル・シャプリエ法や最高価格令のうちに見出した〝限界〟は、宣伝活動と実践活動（経済的、政治的―法律的）が交錯する全過程をつうじて順次にのりこえられ、遠くへおしやられる」（グラムシ選集1「フランスの国民生活についての覚え書」二一五ページ）（ル・シャプリエ法と最高価格令はプロレタリアートの階級闘争への登場の崩芽を示すものであった）

「一八四八年以前に現われ、一七八九年からテルミドールまでのジャコバンの経験を科学的にねりあげた表現としていわゆる〝永続革命〟の政治概念。この定式は、大きな大衆的政党と大きな経済的組合がまだ存在しておらず、社会がまだ多くの点でいれば流動状態にあった歴史的時期に固有なものである」「一八七〇年以後の時期には、ヨーロッパの植民地的膨張にともない、これらすべての要素が変化し、国家の国内的および国際的な組織的関係は、より複雑に、より精密になり、〝永続革命〟の一八四八年の定式は、政治学では、〝市民的ヘゲモニー〟の定式にねりあげられ、克服された。政治技術でも、軍事技術に生じたのと同じことが生じた。運動戦はますます陣地戦に変り、国家は、平和時に細心に技術的に戦争を準備するかぎり戦争に勝利することができる。現代民主主義の精密な構造は、国家的組織体であれ、市民生活における複雑な諸結社であれ、政治技術にとっては、陣地戦における〝塹壕〟と前線永久堡塁をなしている。それは、以前には戦争の〝すべて〟であった運動の要素を、たんに〝部分的なもの〟にしている、等々。」（「文庫」三一ページ）この「〝永久革命〟の一八四八年の定式」に対する批判は明白に「フランスの階級闘争」のエンゲルスの「序文」における一八四八年当時のマルクス・エンゲルスの考えた「永久革命の定式」の失敗したことの総括と正確に対応している（M・E選集第五巻上、一五八―一六三ページ）。実際、あらかじめの大衆の獲得というコミンテルン第三回大会の光に照らしてのみ「陣地戦」の正確な評価が可能となる。

コミンテルン第三回大会の「革命党と議会に関する指導原理のテ

ーゼ」は革命的議会主義と関連させてつぎのようにのべている。「大衆闘争において、プロレタリアートの指導党は、あらゆる合法的陣地をうちかため、革命的活動の補助的な支点となし、かつこれらの陣地を大進軍、大衆闘争のカンパニア計画に従属させなければならない。ブルジョア議会の壇上はそのような補助的支点の一つである。」これがグラムシの立場なのだ。グラムシにとっては労働組合もまたそうしたブルジョアジーとプロレタリアートの二つのヘゲモニーの間の争奪戦の位置を占めている。それゆえに労働組合の獲得は、意識的努力なくして（経済主義批判なくして）はありえない。経済危機、よく組織された少数の前衛の「正面攻撃」などで組合が動かせるものではない。このことは、一九一九年の「労働組合と評議会」で労働組合について「ある意味ではそれは資本主義社会の補完物である」とのべている。こうした組合物神化とは無縁な態度であるからこそ、一九二七年のイタリア共産党が採用したファッシズム労働組合内部での闘争、というグラムシの獄中からのすぐれた指令がでてくる。

それ故に「陣地戦」とはエンゲルスがいわゆる一八四八年の「永久革命」の定式を「克服」してのべたことを一層具体化しているのである。つまり「奇襲の時代、すなわち意識のない大衆の先頭に立った意識ある少数者が遂行した革命の時代はすぎさった。社会組織が完全に変革されるためには、大衆自身がその変革にくわわり、彼ら自身が、問題の本質はなにか、なんのために彼らは身体と生命をかけて行動をおこすのかを、みずからすでに理解していなければならない。このことを、吾々に最近五十年の歴史がおしえてくれたのだ。だが、大衆がなにをなすべきかを理解するためにはそのためにはながいあいだの忍耐づよい仕事が必要である。」（エンゲルス『フランスにおける階級闘争』序文）

以上のことからも明らかのように、三「陣地戦は、暴力革命的機動戦や突撃戦に比べて、民主的・平和革命的である」（柴田「〝平和革命〟論の歴史的系譜」思想八月号）という形式主義的、機械的理解はグラムシには無縁であって、そのことは「あらゆる政治闘争はつねに軍事的基体をもっている」（文庫一九二ページ）「政治は軍事的側面よりも上位にたたなければならず、政治だけが機動と運動の可能性をつくりだす」（文庫、一九六ページ）という陣地戦（政治闘争）と機動戦（武装蜂起）の弁証法的把握にみることができる。「どのような情勢下でも、決定的力とは、恒常的に組織され、長期にわたって整備された力、情勢が有利であると判断するや、前進できる力である。したがって、本質的任務とは、この力そのものを形成し、発展させ、ますます等質的な、充実した、自覚的なものにするために、系統的に、忍耐づよく待つことである。」「あらゆる時代をつうじて軍隊は、このような配慮をもって、いつなんどきでも戦端をひらく用意をととのえていたのである」（文庫一〇四ページ）

グラムシのトロッキー批判は、まずトロッキーの「永久革命」論を徹頭徹尾歪曲させることからはじまる。つまり単なる永久革命のいわゆる「一八四八年定式」というよりはブランキズムに対する批判にすぎない。しかももっとひどいしろものであって「敗北の原因でしかない時期における正面攻撃の政治理論」（文庫一九七ページ）という把握である。コミンテルン第三回大会でいわゆるグラムシのいう「陣地戦」＝統一戦線論およびあらかじめの大衆の獲得を提唱したのはレーニンとともにトロッキーであったこと、グラムシ理論

にとってもその前提となっている世界革命を定式化したのもレーニンとトロッキーがあり、トロッキーの永久革命論が世界革命論を本質としていることを故意に無視し、捨象し、そのことについてはなにものべていない。グラムシのトロッキー・ローザ批判はほとんど彼等ののべたこととは関係のないことを批判している。だがグラムシがトロッキーを批判したという事実はトリアッチによってその後徹底的に政治的に利用されている。

ここでついでにのべておけば一九二七年モスクワのトリアッチがコミンテルンでスターリンのトロッキー批判に対して民主主義的理由によって保留しようとした態度（シローネの証言「神はつまづく」）とほとんど同一の中間主義的態度が、逮捕、投獄直前のグラムシの態度ではなかったか、ということである。なおトリアッチによればグラムシは獄中で他の獄内の同志がトロッキー的になったときに「トロッキーは〝ファッシズムのふしだらな女〟である、という意味深長なスローガン」を与えたということであるが、こうしたトリアッチの証言しかえられないことは意味深長な事実も別にあるのかもしれない。ともあれグラムシははっきりとトロッキーに対してスターリンをボリシェヴィキとして擁護した（文庫「国際主義と国民的政治」一九七ページ）。それはスターリン主義者によって政治的に利用されてきた。だがトロッキーのものとしてではなくそのスターリンのものとして与えられている内容――「発展は国際主義にむかっているが、出発点は〝国民的〟であり、この出発点からスタートしなければならない。しかし展望は国際的であり、国際的でしかありえない。それだから国際的階級が国際的な展望と指針にしたがって指導し、発展させるべき国民的諸勢力の結合を、精密に研究する必要がある。指導的階級は、この結合を精密に解釈するときにだけ、指導的である。この階級そのものが結合の構成分であり、まさにそうであるかぎりにおいて、運動に、一定の展望における一定の方向をあたえることができるのである。」「国際的性格の階級は、厳密に国民的な諸社会層（知識人）、さらに時としては、まだまだ国民的でない、割拠主義的、自治体主義的なそれ（農民）をも指導するかぎりで、ある意味ではみずから〝国民化〟しなければならない」。これがスターリン主義者のものでないことは明白であり、スターリン主義からではなく革命的マルクス主義からのみ発展させることのできる内容なのである。